

〈論 文〉

# ビジャ・エルサルバドルにおける社会主義と工業団地

——自主管理社会主義から住民コミュニティへ——

原 田 金 一 郎

## 目 次

- I はじめに——前稿を振り返って
  - II 自主管理社会主義の試行とその限界
    - 1 アラゴン
    - 2 アスクエタ
    - 3 セバジョス
    - 4 カリジョ
    - 5 小結
  - III ビジャ・エルサルバドル工業団地——マイクロ工業化の成果と諸問題
    - 1 ビジャ・エルサルバドル工業団地概史
    - 2 工業団地の企業主たち
      - (1) ノア(家具製造)
      - (2) リバス(製靴)
      - (3) チャルコ(工芸)
      - (4) クリ(金属加工)
      - (5) エストラダ(鑄造)
      - (6) バレット(養鶏[食品])
      - (7) リオ(製パン[食品])
      - (8) 小結
  - IV むすびに——自主管理社会主義から住民コミュニティへ
- 参考文献目録

## I はじめに——前稿を振り返って

ペルーの首都リマから南へ20キロ離れた所に人口約40万人のビジャ・エルサルバドル市がある。この市の特殊な歴史については、すでに「予備的省察」として前稿において論じた<sup>1)</sup>。この前稿には、4つの論点が含まれていた。

(1) ビジャ・エルサルバドル市の歴史の時期区分——1971年スラムとして出発したビジャ・エルサルバドルは、自主管理都市共同体 (CUAVES)<sup>2)</sup> を結成し、独自の自主管理社会主義を展開した。この第一期に対し、1984年ビジャ・エルサルバドル市の発足と共に始まる第二期においては、しだいに市当局 (municipalidad) の権力が強化し、それにつれて CUAVES の影響力は低下していった。これが現在に至るビジャ・エルサルバドルの歴史である。

(2) 自主管理社会主義の起源——このビジャ・エルサルバドルの自主管理社会主義の起源については諸説ある。その中で最も有力な説は、プレインカ時代からの先住民共同体にその起源を求める説である。このような伝統的な共同体経験や近年の協同組合の経験を持つ農民が、ビジャ・エルサルバドルでも主体的に活動したそうであり、この説の有力さを裏付けている。

(3) 代替的社会主義論とビジャ・エルサルバドル——私見によれば、ビジャ・エルサルバドルの自主管理社会主義は、「現存社会主義」崩壊後に模索されるべきオルタナティブな社会主義の一つである。

(4) 住民コミュニティとビジャ・エルサルバドル——このような70年代の自主管理社会主義であれ、1984年以降の市当局体制下のビジャ・エルサルバドルであれ、そこに共通しているのは住民の参加を基礎とする「都市共同体」的特質である。これを、仮に「住民コミュニティ」と呼ぶことにしたい<sup>3)</sup>。

以上のように、前稿においてはビジャ・エルサルバドルの特殊な歴史と、その結果生まれた独自の社会・経済・政治システムについて概観した。この前稿を受けて、本稿においては、70年代自主管理社会主義のさらなる分析と、これ

1) [原田 2000]。

2) Comunidad Urbana Autogestionaria de Villa El Salvador.

に対する批判をインタビューの記録によって述べる。次に、後半部においては、現在のビジャ・エルサルバドル市の経済的中心となっているビジャ・エルサルバドル工業団地<sup>4)</sup> についてその概史を述べ、企業主たちのインタビューによりつつ、その成果と目下抱えている諸問題について明らかにすることを旨とする。

最後に、本稿は2000年4月から半年間、現地にて行った調査の成果をまとめたものであるが、前稿同様にいまだ未完成なものであることをお断りしておきたい。

## II 自主管理社会主義の試行とその限界

本章においては4名のインタビューを紹介する。その1人目は70年代ビジャ・エルサルバドルの指導者であったアラゴンである。アラゴンは「自主管理社会主義」の提唱者であり、「自主管理都市共同体 (CUAVES)」の命名者でもあった。現在はアンカシュ県シラスにおいて農民の地方行政への参加を支援しているとのことである。

2人目は、CUAVES 内部でアラゴンと対立する一派をなし、ビジャ・エルサルバドルの初代市長 (1984~89年, 2期) を務めたアスクエタである。アスクエタは現在リマ首都圏議会議員である。

3人目は、自主管理の立場からビジャ・エルサルバドルを観察してきた研究者で、書物を1冊刊行しているセバジョスである。

- 
- 3) 前稿では「貧民コミュン」と呼んだが、すでに大半の人が「市民」生活を営んでいる現在の住民の状況を考慮すれば、こう呼ぶ方が自然であると考えた。むしろ、住民の約20~25%はいまだ水道・電気のない貧民状態にあることを忘れてはならない[Zeballos 1991:286]。なお前稿では、スウェーデンのフリー・コミュンとの比較の必要性を論じたが、このような国際比較が今後の課題となろう。
- 4) 正式名は Parque Industrial del Cono Sur で「コノスル工業公園」が直訳であるが、わかりやすく「工業団地」と訳しておく。Cono Sur とはリマ首都圏内の地域で Cono Norte, Cono Medio と3つに区分されている。しかし、事実上ビジャ・エルサルバドル市内に存在し、[Távora 1994]のように「ビジャ・エルサルバドル工業団地」と表記している例もあるのでこう表記しておく。

4人目は、現在の CUAVES の書記長カリジョである。CUAVES の現状と、CUAVES から見た市の現状について話してもらった。

## 1 アラゴン (Antonio Aragón, 66 歳)



アラゴン

—私は1971年ビジャ・エルサルバドルに来て、土地侵入を組織した。それまでクスコで農民運動をやっており、そのせいでリマで5年間収監されていた。ウーゴ・ブランコ<sup>5)</sup>とはコレヒヨ [小中学校] で同級生だった。ウーゴは1955年アルゼンチンから帰国し、政治活動を始めた。彼には組織力がなく、代わりに組織面で援助した。1968年クスコに戻り、農民組織化を行い、その活動はクスコ、アレキパ、プーノ、アサングロに及んだ。

—新しい提起 (propuesta)、自治政府 (autogobierno)、下からの民主主義 (democracia desde abajo) など、この運動は素晴らしい経験だった。人々は新しい提起を行い、新しい形態での自治政府をクスコにおいても提唱した。[60年代] の山岳部の農民には何か新しいものがあった。共同体では政治的関心が高かった。

—米国・日本などの先進国も含めて、人類は問題を突きつけられている。飢餓・戦争などに反対し、挑戦すべき時が来ている。そのためには、基礎から小学校で提起を教えるべきだ。根本的に、資本主義、すなわち市場法則に従う

---

5)Hugo Blanco. [ブランコ 1974].

ものに反対すべきである。つまり、交換価値の世界から、使用価値を基礎にする世界へと変革すべきである。そして、あらゆるものを共同体的所有にすべきである。それが、諸個人をつなぐ新しい精神、つまり哲学をもたらすであろう。

——地区 (manzana) 委員会の役割は連帯であった。例えば妻に暴力を振るう夫がいれば、委員会が干渉した。それは、新しい生活の哲学を意味した。共同体は1972年に組織された。「我々は何も所有していないから、全てを所有するであろう」がスローガンだった。最初のビジャ・エルサルバドルは、2 km × 7 km の広さだった。10万人以上の人々が何も持っていなかった。まず水の配給を組織化した。食糧配給についても同様だった。

——子供達の学校をどうするか、が問題になったことがある。ベラスコ [Juan Velasco Alvarado, 1910—77] 政権は進歩主義的であったが、資金が無かった。2万人の生徒達を20km 離れたリマまで送るわけにはいかなかった。参加民主主義、つまり下からの民主主義が問題を解決した。80%の住民が金を支払った。地区集会が処理をした。このことは、住民の教育ともなった。

——水は貴重だった。ビジャ・エルサルバドルは半砂漠で夏暑い。1軒に1本木を植える運動を起こしたことがある。これが共同体のシンボルとなり、意識変革のきっかけとなった。政府はこのことを理解できなかった。(直前に土地の個人化を行おうとした。)<sup>6)</sup>「参加社会主義」をベラスコは言ったが、我々は新しいタイプの参加民主主義を目指していた。

——教育改革が必要である。その場合、各地の文化が同等に尊重されるべきであろう。

——官僚的社会主義、国家経済社会主義は駄目である。基礎的社會主義あるいは参加社会主義でなければならない。私も1952～54年共産黨員だった。ボリビアの例などの教訓が述べている。普遍化しようとしたが、民主的でなく官僚的だった。官僚主義は駄目である。農地改革は社会変革でなければならない。土地のための闘いは政治的なものである。1960年代のクスコがそう教えてくれた。残念なことにマリアテギ<sup>6)</sup>は早く死んでしまったが、これにとって代わる提起が必要である。新しい提起については、誰もまだ研究していない。

---

6) José Carlos Mariátegui, 1894—1930. [マリアテギ 1988及び1999]参照。

〔質問——自治政府とは何か？〕

——資格を持つ全ての家族が意見を持つことであり、それは地区、市、国レベルに及び、資源の配分について決定すること。その場合、中長期的な基礎的計画化は必要であろう。

〔質問——自主管理社会主義とは何か？〕

——改革能力の形成、社会経済的実習を意味する。父親と母親によって基礎共同体を形成し、上位共同体とつなぐ。マチスモ [男性優位主義] ではなく、家族の成員は皆平等である。この組織において役職 (会長、書記など) に再選はない。

〔質問——資本主義とは何か？〕

——権力者が経済資源あるいは生産手段あるいは金を持ち、生産の方向を決定すること。個人が極大利潤という形で富を支配することである。

——全ては、政治であり、哲学である。

——ベラスコ期 [1968~1975年] の研究が必要である。なぜ、ベラスコの提起は失敗したのか、それを知ることが重要である。

## 2 アスクエタ (Michel Azcueta, 53 歳 元ビジャ・エルサルバドル市長)



アスクエタ

〔質問——ある書物によれば、あなたは「社会主義的性向」を有しているとされているが、これについてはどうか？〕

——その通りで、私は社会主義の旗印を掲げている。それは、何よりも大切なものは機会の均等であると考えからである。

[質問——あなたは CUAVES を批判しているが、これについてはどうか?]

——私は CUAVES の創立者の一人で、批判したことはない。CUAVES は歴史的指標である。私が批判を行ったのは、そのリーダー達に対してである。

[質問——「共同体の法は市の法である」とあなたは言ったが、これについてはどうか?]

——私は CUAVES によって市長に当選した。しかし、80年代に CUAVES は変質した。工業団地の理事会に CUAVES 代表を入れたのも私だ。しかし、86年、87年頃から CUAVES は現実に対応しきれなくなった。むしろ、地区委員会などにおいてその影響は残っている。しかし CUAVES はビジャ・エルサルバドルの空間的拡張についていけなかった。その勢力範囲を住宅街に限定していたが、1983年以降工業団地、農牧業地帯、海岸地帯、新居住地（パチャカマック）など、市街は拡大していった。

——私は、ビジャ・エルサルバドルは「島」ではない、と繰り返してきた。CUAVES の経験は繰り返せない。しかし、市の経験は繰り返せる。今やビジャ・エルサルバドルは民衆市(*distorito popular*)である。CUAVES はビジャ・エルサルバドル固有の独自性である。しかし、社会的所有は今や不可能であり、小規模所有への転化が行われている。

——ビジャ・エルサルバドルは民衆市であるが、ペルー全体はネオリベリズムである。そして、水道、下水、電気などを勝ち取ってきたことは、ビジャ・エルサルバドル固有の経験である。ビジャ・エルサルバドルの「開発計画」[1999年住民投票]については、市民の諮問に委ねることはよいことだ。とりわけ青少年(16才以上)の参加はよいことだ。社会教育においては、価値を教育せねばならない。例えば、公園も(その植物も)、工業団地も教育の一環である。

——私はコレヒヨで歴史と地理を教えていた。カトリック大学で歴史を学んだ。市長時代は25のコレヒヨの建設に関わった。現在は、リマ首都圏議会議員で、産業と青少年に関する委員会で活動している。1980年代最大の問題として

センデロ・ルミノソは深刻な問題であった。まるで戦争のようだった。彼らはビジャ・エルサルパドルを破壊しようとした。政府とビジャ・エルサルパドルの関係は、対立していた。1971～1990年の4政府ともにビジャ・エルサルパドルを恐れている。フジモリ氏もそうである。工業団地を訪れたこともない。ビジャ・エルサルパドルのためには、ほんの僅かのことしかしなかった。センデロ問題についても同様だった。

——私の成果の一つは、ビジャ・エルサルパドルの統合である。また工業団地もそうで、ペルーで [成功した] 唯一の例である。工業団地は大成功で、リマ中に広めようとしている。例えば、アヤクチョに使節団を送ったりしている。

——共同体信用金庫の失敗については、まず、資本の概念が無かった。それを利用しようとしなかった。見通しの無い預金であった。失敗の政治的な理由として、CUAVES の一部が市に反対したことが挙げられるが、これは反歴史的なことであった。

——貧困は連帯を生み出さない。貧困は何もよいことではない。貧困の美化には反対である。尊厳を持って生きることが大切である。私は理想主義者であって、プラグマチストではない。問題は構造化している、つまり、失業、貧困など全国的な問題が存在しているからである。

——共同体は解体しており、再統一は困難だ。ビジャ・エルサルパドルの人口は約40万人で、大きな市である。

[質問——資本主義とは何か?]

——経済的搾取、少数者のためのものであり、不平等を生み出すもの、不公正である。その実例は昨日の世界銀行の会議である。20%の国に豊かさが集中し、他の国は貧しいままであろうと述べている。この20%の国の富は10年間で3倍になるだろうという。全人類に資源がゆきわたるようにすべきである。他方では、基礎的必要を満たせない者が多勢いる。これは不公正な不平等である。

[質問——社会主義とは何か?]

——人間化の過程、人間中心の経済モデルである。個人の尊厳が尊重される。環境問題がとりあげられる。平等、正義、連帯。個人モデルでもあり、社会モデルでもある。



[質問——ビジャ・エルサルバドルは社会主義か？]

——しかし「島」ではない。資本主義の中の自主管理社会主義はありえない。それは局地的実験であった。国際化と局地開発は両立する。今やビジャ・エルサルバドルは29年の歴史をもっており、その影響力は大きくなってきており、他の諸共同体にも影響を与えている。

3 セバジヨス (Eduardo Zeballos Marroquin, 65 歳, 工学士, 自主管理研究センター [CIDIAG]<sup>7)</sup> 所長)



セバジヨス

—— CUAVES の社会主義はすばらしいもので、自主管理と連帯にもとづくものであった。組織には活動の経験があった。山岳部における農業共同体での経験が役立った。つまり、都市においても同様の共同体を作ろうとした。全領域において連帯の感情が強かった。それが CUAVES の力の源であった。組織への参加は強大であった。そして最後の地区にいたるまで組織化した。こうして組織は十分に機能したのである。

——90年代は暴力とフジモリ政権の物価上昇（フジショック）が大きな影響を与えた。スラム(pueblo joven)に対して政府は特別に援助したが、貧民にとってこの影響は強大なものだった。強力な組織は、CUAVES と教会だった。

7) 自主管理情報・統合開発センター。Centro de Información y Desarrollo Integral de Autogestión.

例えば、民衆食堂(*comedor popular*)と呼ばれる食糧援助を行った。このような事態はどこのスラムにおいても生じた。ビジャ・エルサルバドルとの違いは組織であった。指導者の指示はただちに共同体員に伝わった。このような民衆機能(*funcionamiento popular*)が、他のスラムとは異なっていた。

——厚生大臣による指導、健康計画(*plan de salud*)があった。健康とは何か、なぜ働いているのかを教えた。健康は(一部分ではなく)統合的なものでなければならない。貧困も統合的健康(*salud integral*)の対象に含まれた。健康とは、人間の十全な開発という意味において革命である。病気の前に予防が必要である。例えば、子供が何を食べるかということも予防に入る。健康計画は、共同体全体を健康にしようとした。現実化は難しく、「経済」が問題だった。

——農民においては、生活と生産が直結している。都市は異なる。都市には生産がない。ビジャ・エルサルバドルもその一例である。CUAVES は「生産」を考え、政府に働きかけた。しかし、共同体所有は困難だった。

——工業団地は政府の事業だった。人々は工業団地に行く。なぜなら商品の種類が多く、安いからだ。小職人は当初組織化されていたが、しだいに個人主義的となった。そして CUAVES の集团的所有、集团的生産とは合わなくなってしまった。

——共同体所有は、灯油スタンド、鉄工所、薬局、パン製造所などであった。結果は、効率の問題があった。共同体と共同体所有企業の間には葛藤が生じた。つまり、共同体と企業の間には矛盾が企業閉鎖をもたらしたのである。

——共同体信用金庫は、共同体銀行をもくろんでいた。政府との関係が強かったが、政府は結局実行しなかった。そして信用金庫の資本主義化をもくろんだ。自治が必要だったが、困難だった。また、共同体の代表者と共同体の間には対立も問題だった。共同体員は月に少額を拠出したが、それでは足りなかった。政府の援助は一時的なものだった。

——組織と意識が重要だった。共同体員の間には争いもあった。カウディリスモ〔領袖主義〕や個人が問題であった。例えば、アラゴンとアスクエタがその例である。内部抗争は常にあった。CUAVES と市当局の間にもあった。このことが指導者の意識に無かったことは問題だった。

[質問——「下からの民主主義[Zeballos 1991:201]」とは具体的には何か?]  
——参加、それも基礎から、家族や近隣組織が支えるものである。

[質問——国内移民の動機の57%が「仕事」と答えているが<sup>8)</sup>、これはどうか?]

——1950年代リマで増大したが、現在はもっと大量に生じている。また移民の原因には「暴力」もある。

[質問——水道の不足している家庭(25%)、電気の不足している家庭(20%)とあるが<sup>9)</sup>、これはどうか?]

——普及は進んでいるが、新規移民の増大に追いつけないでいる。

[質問——市当局の人間は、公正(justo)と連帯(solidario)をその目標としてあげているが、これについてどう思うか?]

——アスクエタは社会主義は「島」ではないといった。これは正しい。権力が重要である。ビジャ・エルサルバドルの影響の例としてはワイカン(Huaycan)の例がある<sup>10)</sup>。

[質問——自主管理社会主義についてどう思うか?]

——解体したとは思えない。いまだ存在している。それは、完全な民主主義であった。自主管理は継続している。それは隣人、仲間同士のつきあいである。参加民主主義が存在した。開発の自主管理が行われていた。このような思考の価値はまだある。なぜ社会主義は失敗し、資本主義に向かっているといえるのか。社会主義は福祉を考える。それは、連帯・公正・平等の同義語である。資本主義とは、儲け、より高度な経済をめざすこと、エゴイズムと個人主義である。会社は発展しているが、その周囲はそうではない。これでは、人類の未来はどうなるのか?ネオリベラリズムは失敗している。それは、人類の生活向上を考えていない。豊かな者はより豊かになり、貧しいものはより貧しくなることをこの考えは意味している。これに反する例もある。例えば、アンカシュ県

---

8)[Zeballos 1991 : 210].

9)[Ibid.:286].

10)リマ県チョシカ近くのスラムで、もうすぐ市になるだろうといわれている都市共同体。

シワス [Sihuas, 人口3万人] では、農民が地方行政を掌握し独自の活動を展開している。

#### 4 カリジョ (Manuel Carrillo, 36歳, CUAVES 書記長)



カリジョ

【質問——CUAVESの現状はどうなっているのか?】

——再編・再強化の途上にある。それは共同体の制度化である。共同体は36万人の市民からなっており、現在はその近代化につとめている。市当局とも話し合いを行っている。しかし、資金も支援もない。[ビジャ・エルサルバドルには] 下部構造が欠落している。とりわけ青少年の雇用源が問題だ。市当局は資金をもっている。CUAVESは心をもっている。自主管理は死んではいない。

【質問——社会主義についてどう思うか?】

——70年代ペルーでは、膨大な国内移民が生まれた。人々はリマへ未来を求めてやってきた。この人々の必要から社会主義が生まれた。それは一つの解決策であった。革命的軍事政権はCUAVESを支援した。統合組合(CICA)<sup>11)</sup>が必要から生まれ、1973年第1次協定がかわされた。同年にCUAVESも発足した。現在までに8つの協定が結ばれた。1984年市当局が発足した。自主管理は継続した。市当局とCUAVESは混合委員会(comisión mixta)を作った。現在の

11) 自主管理共同体統合組合 (Cooperativa Integral Comunal Autogestionaria), CUAVESの旧名称、1972年創立。

ビジャ・エルサルバドルは社会民主主義的政治方針を持っている。理論的にはネオリベラリズム、社会的市場経済の立場をとっている。ソモス・ペルー<sup>12)</sup>は社会民主主義ではない。ネオリベラリズムは自由市場を尊重する立場だが、混合経済が重要である。

[質問——資本主義とは何か?]

——私的投資、富める者はより富み、貧しい者はより貧しくなるシステム。資源の乱費。低開発を生み出すものである。

[質問——社会主義とは何か?]

——統合的福祉。国民的生産力。資源の活用。国の産業的發展などからなるものである。

[質問——CUAVESの失敗の理由は?]

——失敗ではない。13年間機能した。ビジャ・エルサルバドルの基盤はCUAVESだった。新しい市を目指した。市当局はCUAVESを吸収しようとした。イデオロギー闘争は強大になっている。89年協定では民主的闘争をうたっている。我々は人的開発に努めている。CUAVESは人間を補充している。CUAVESは教育・スポーツ・文化の振興に努めている。我々は必要な組織だ。自主管理はペルーでもラテンアメリカでも死んではいない。

[質問——ビジャ・エルサルバドル市の「開発計画」についてどう思うか?]

——総合的計画が重要である。また、より大衆的な参加が必要である。かつて1984年にアスクエタ市長が同様の計画を提唱したことがある。しかし、選挙用のもので、参加は部分的なものだった。

[質問——工業団地の理事会への参加はどうなっているのか?]

——現在は参加していない。1995年まで参加していた。将来的にはCUAVESと代替するであろう。

[質問——ホセ・カルロス・マリアテギについてどう思うか?]

——理想であり、民衆のために働くことを教えた。『ペルーの現実解釈のための七試論』[マリアテギ 1988]の価値は今もある。ホセ・カルロス・マリア

---

12)Somos Perú, 現市長もそのメンバーである政党, その路線はあえていえば中道左派にあたる。

テギは我々のガイドであり導きの星である。未来指向者であり、社会主義者である。

——現在ワイカン(Huaycan)に自主管理共同体というものがあり、ビジャ・エルサルバドルに似た発展をとげている。まもなく市になるだろう。[現在はスラム]。

——ビジャ・エルサルバドルはラテンアメリカ・レベルで唯一の自主管理である。それは、途上国、貧困国の現実から生まれた。ビジャ・エルサルバドルの主人公はだれか？

——それは民衆である。

## 5 小結——論争整理の試み

### (1) アラゴン

まずアラゴンの発言内容を整理してみよう。それは、次の6点に要約できる。

Ar-1) 自治政府

Ar-2) 下からの民主主義

Ar-3) 提起の教育

Ar-4) 使用価値の尊重

Ar-5) 農地改革は社会変革でなければならない。

Ar-6) あらゆるものの共同体所有化

1960年代クスコで農民運動に携わったアラゴンは、そこで多くのことを学んだ。それが自治政府や下からの民主主義の重要性の強調を生み出したのであろう。さらに、アラゴンの独自性は提起(propuesta)の重要性の指摘にある。自発性とか主体性とも言い換えられると思われるこの語を、アラゴンは最重要なものと考えている。また教育改革も重要で、提起の教育をすべきであるとしている。同時にアラゴンは、資本主義の一大特徴である交換価値の世界に対し、真っ向から否定して、使用価値の尊重をいう。つまり、資本主義から社会主義への移行は、社会の主軸の交換価値から使用価値への転化を意味するのである。同時にアラゴンは、農地改革は単なる所有の変化に終わってはならないという。それは総体的な社会変革でなければならないのである。アラゴンは、あらゆる

所有の共同体化を提唱している。この点は、次に取り扱うアスクエタの発言と真っ向から対立する点である。しかし、アラゴンにとっては自明の前提なのである。

## (2) アスクエタ

かつて CUAVES 内部でアラゴンのライバルとなっていたアスクエタの発言内容の骨子は、以下のとおりである。

Az-1) CUAVES は現実に対応できなくなった(1986~87年)。

Az-2) ビジャ・エルサルバドルの空間的拡張についていけなかった。

Az-3) 社会的所有は不可能である。

Az-4) 貧困は連帯を生みださない。

Az-5) 共同体の再統一は困難だ。

Az-6) 資本主義の中の「島」としての自主管理社会主義はありえない。

この中でアラゴンと真っ向から対立するのは、Az-3) と Az-6) である。アラゴンにとって必須条件である社会的(共同体)所有をアスクエタはきっぱり否定する。

次にアスクエタの「島」理論に対してもアラゴンは受けつけないであろう。自治政府とは、まさに「島」であるからだ。

このように両者は対立しており、折り合う余地はない。しかし、農民運動で鍛えあげられた実直なアラゴンと、いかにも政治家らしい能弁さをもつアスクエタは、それぞれ70年代と80年代ビジャ・エルサルバドルを代表する2大人物であるということに間違いはない。

## (3) セバジョス

研究者セバジョスの発言内容は次のとおりである。

Z-1) CUAVES の社会主義は自主管理と連帯からなっていた。

Z-2) 強力な組織化

Z-3) 民衆機能の重要性

Z-4) 共同体所有には効率上の問題があった。

Z-5) 社会主義は「島」ではないことの肯定

Z-6) 自主管理は持続している。

ここには Z-4)、Z-5) においてアスクエタ発言との共通性がみられる。他は、自主管理社会主義を擁護する発言である ( Z-1)、Z-2)、Z-3)、Z-6))。とりわけ共同体内部の情報網の優秀さを「民衆機能」として絶賛している点が注目される。以上が研究者セバジョスの発言内容である。

#### (4) カリジョ

カリジョの発言内容のうち本稿における議論に関連するものは次の5点である。

C-1) 必要から社会主義が生まれた。

C-2) 資本主義とは貧富の格差である。

C-3) 社会主義とは統合的福祉である。

C-4) 混合経済が重要である。

C-5) ビジャ・エルサルバドルの主人公は民衆である。

まず70年代自主管理社会主義についてカリジョは、民衆にとっての必要から生まれたものと規定する。そして資本主義とは貧富の格差を有するものとして退け、社会主義を統合的福祉システムとして支持する。また社会的所有の是認を意味する「混合経済」の重要性を指摘する。ビジャ・エルサルバドルの主人公が民衆であるという言葉は、いまだ隣人組織としての CUAVES が残存していることの強調であろう。

#### (5) 総括

以上、アラゴン＝アスクエタ論争を中心に整理を試みた。70年代自主管理社会主義を否定するのは(本人はそのことを否定しているが発言内容において明らかである)、アスクエタ1人である。アスクエタは自身も CUAVES の創立者の1人であり、CUAVES の支持により初代市長に当選し、「すべての共同体の法は市当局の法である」という有名な言明を行った。しかし、その後変身して、現在はソモス・ペルーという中道左派を標榜する政党のメンバーとしてビ



ジャ・エルサルバドルの政界の実力者となっている。「第1期においてミCHEL・アスクエタ市長は、『すべての共同体の法は市当局の法である』というよく知られている市条令を声明した。このようにして、共同体機関と市機関の並列制の慣習が生まれた。というのは、両者は同一の機能を有していたからである。この状況は、80年代のすべてを通じて存在し、両権力の間で恒常的抗争をもたらした。」<sup>13)</sup>

他方アラゴンは、またもや原点にたち帰って、アンカシュ県シワスにおいて農民の行政参加の運動を支援する活動に従事している。田舎中学の教師とも思える風貌と瘦身の見かけによらず、話し出すと雄弁だし、それこそ提起能力を持つ人物らしい迫力を持って話す。その内容は論理的であり、説得力を持っている。ユートピア主義者であるアラゴンと現実主義者のアスクエタとは、水と油のように対立している。ただし、両者に共通の性格もある。それは、ともに教師タイプだということである。

ただし、アスクエタの発言の中にはもっともといえる点もある。それは、CUAVES がビジャ・エルサルバドルの空間的拡張についていけなかったという(2)の Az-2) 発言である。人口上からも、せいぜい10万人台の1970年代に比べて、30万人に膨れ上がった住民を抱えることになった1980年代においては、組織上、技術上の改良が必須となっていたであろう。CUAVES はそれを成しえなかったのである。

その他の障害としては、指導者の誤り、新しい状況に適応できる新しい指導者が出現しなかったことがあげられる。さらには政治的問題があった(選挙活動における政党の制度化に失敗した)<sup>14)</sup>。

研究者セバジヨスは自主管理研究センターの所長であり、自主管理を高く評価するのは当然である。ただし、この自主管理の立場とアスクエタ発言を認める Z-4) 及び Z-5) 発言とは矛盾するのではあるまいか。

活動家カリジョにとっては苦渋の続く日々であろう。しかし、今こそ近隣組織がその機能を発揮すべき時である。市当局の政策も「開発計画」にみられる

13)[Pomar 1997:146].

14)[原田 2000:31]におけるニチヨの発言参照。

とおり民衆指向的であり、ソモス・ペルーに所属するプマル市長は中道左派で「社会主義」を標榜している。一つのチャンスではないだろうか。

#### (6) 付論——アラゴン＝アスクエタ論争

本稿の脱稿後(2000年7月23日)、同年8月16日アラゴンに再会する機会があった。そこでアラゴン＝アスクエタ論争のような形態を本稿に盛り込みたいと提案したところ、快く再インタビューに応じてくれた。

以下はアスクエタのコメントに対するアラゴンの反論である。必ずしも2人の議論はかみ合っていない。そのこと自身が、両者の議論が平行線を辿るほど異質なものであることを示している。

##### 1. Az-1) CUAVES の現実への不適応(1986～87年)について

CUAVES は社会的提起を行った。環境問題にみられるように、この問題の解決に資本制システムは不適である。民主主義、下からの権力が必要である。出発点は全人類の生存である。これは資本主義では不可能なことだ。

CUAVES はブレインカ時代にも存在した。したがって、環境への不適応ということはない。

民主主義は人の必要がなければ存在し得ない。社会主義は「島」ではなく、民衆の内部化(*interiorizada del pueblo*)によるものであり、哲学から出発すべきである。交換価値から使用価値への変革が必要である。この意味において市場システムへの依存はばかっている。人類は、未来の子孫のための世界を確保する必要がある。

提起されているのは、人々の意識変革である。このことをミCHEL・アスクエタは理解していない。

##### 2. Az-2) CUAVES はビジャ・エルサルバドルの空間的拡大についていけなかった。

工業団地の例にみられるように柔軟性はあった<sup>15)</sup>。今後も例えばインターネットによる世界的連帯といったものの必要があるだろう。

---

15) Ⅲにおいて後述するように、たしかに1987年工業団地発足時は、その理事会にCUAVES書記長が参加していた。しかし、1995年以降は参加していない。

3. Az-3) 社会的所有は不可能である。

もともとはベラスコ政権による用語であるが、新しい形態への出発点であった。個人的所有の要素は残っている。その一例が工業団地であり、共同体所有、私的所有が混在していた<sup>16)</sup>。

4. Az-4) 貧困は連帯を生みださない。

連帯とは、人間であること、使用価値の世界、扶助を意味している。[したがって当然のことである。]

5. Az-5) 共同体の再統一は困難である。

その可能性は常にある。(CUAVES ではなく)提起としてある。進歩、環境汚染の解決などを考えると根底的解決の道がない。青少年に期待するしかない。世界的哲学が必要とされている。

6. Az-6) 社会主義は資本主義の中の「島」ではありえない。

自治政府(*autogobierno*)とは、地域的に人々が操作する新しい形態の政府である。その作用は、自己の領域内に限られたものではない。中央政府との交渉をも含むものである。したがって「島」ではない。

### III ビジャ・エルサルバドル工業団地——マイクロ工業化の成果と諸問題

#### 1 ビジャ・エルサルバドル工業団地概史

1968年クーデターにより政権を掌握したベラスコ率いる革命的軍事政権は、次の3つの目標を掲げていた。(1) 全面的参加の社会的民主主義、(2) 生産の協同的形態、(3) 社会的所有企業の設立<sup>17)</sup>。

このベラスコ革命がビジャ・エルサルバドルを生み出したのであるが、工業団地の基盤形成についても、とくに(2)と(3)に関連して、影響を及ぼした。工業団地の前史についてみれば、それは3期に区分される。第1期、1971

---

16) この点についても、たしかに工業団地発足時には社会的所有企業が存在したが、現在ではほぼ消滅している。

17) [Távora 1994 : 105] .

～75、ベラスコ期、国家の強力な介入が特徴で、住宅地、工業地、農牧地を形成した。第2期、1976～85、国家との断絶、社会的所有部門は国家（ベルムデス政権）から支援を受けられなくなった（1976年4月までに3企業しか設立されなかった）。第3期、1986～94、輸出企業の育成に転化した<sup>18)</sup>。

一説によれば、1989年までビジャ・エルサルバドルには約20の工業企業が存在するだけであった。その大半は小規模で、4社は自主管理で計25人を雇用していた<sup>19)</sup>。

この前史において忘れてはならないものは、1974年の共同体による「ビジャ・エルサルバドル総合開発計画」である。そこに盛り込まれていたことは、(1) 社会的所有企業の形成の促進、並びに共同体の利益に寄与するための地方自治体公共企業を形成すること。(2) 1975～76年の2年間に新規雇用を約3000創り出し、失業率を58%から42%に減少することを目指すこと。(3) 燃料〔灯油〕、基礎食料、住宅建設資材などの消費者価格を10%値下げすること、であった<sup>20)</sup>。

こうして1987年6月4日ビジャ・エルサルバドル工業団地が創設された。その特徴は強力な国家の介入と共同体の参加である。例えば工業団地を統括する自治機関は、6人の理事からなっており、3人は共同体から、残る3人は中央政府からのメンバーであり、理事長は市長がつとめた。他の共同体からのメンバーは、CUAVESの書記長と中小産業組合（AMPIVES）<sup>21)</sup>の会長であった。政府からのメンバーは開発融資公社（COFIDE）、国立計画庁（INP）、産業・商業・観光・統合省（MICTI）の代表者であった<sup>22)</sup>。

国家の介入は融資に占める比率にも如実に反映されていた。

注目すべきは、この団地への参入企業の大半が中小企業であったことである。

---

18) [Ibid. :121].

19) [Zeballos 1991 : 226].

20) [Burga 1989: XII].

21) Asociación de Medios Pequeños Industriales de Villa El Salvador.

22) Corporación Financiera de Desarrollo; Instituto Nacional de Planificación; Ministerio de Industria, Comercio, Turismo e Integración.

表1 工業団地融資源別投資蓄積額

(単位：千ドル)

	1990年12月		1991年3月		1991年9月	
	ドル	%	ドル	%	ドル	%
政 府	5,738	66.4	5,972	61.5	6,440	59.2
国際機関	1,898	22.0	1,982	20.4	2,338	21.5
私的投資	1,000	11.6	1,752	18.1	2,101	19.3
	8,636	100.0	9,706	100.0	10,879	100.0

出所) Távara 1994 : 139

これはペルー経済全体にいえることであって、例えば1990年ペルーの労働力の73%が雇用19人以下の生産単位で働いていた<sup>23)</sup>。「この小生産者のダイナミズムのネットワークは一つの歴史的パラドックスである。その理由は貧困の深化と国家諸機関の危機である」<sup>24)</sup>。

このような状況の結果、工業団地参入企業の8%が100m<sup>2</sup>を占有したが、42%以上は35m<sup>2</sup>以下を占有しているにすぎなかった<sup>25)</sup>。

他の統計によってビジャ・エルサルバドルの住民構成をみてみよう。

表2 活動分野別住民構成 (1989年)

農 牧 業	5.19 %
工 業	13.90
商 業	52.66
医療・保健	2.96
教 育	6.58
サ ー ビ ス	18.71
合 計	100.00

出所) Zeballos 1991:318

23) [Távara 1994 : 118].

24) [Ibid. :189].

工業の未発達が、工業従事住民の比率を低めていることがうかがえる。反対に商業従事住民比率が高いが、零細行商人の多数の存在を示唆しているものと思われる<sup>26)</sup>。

以上のような住民構成は、土地利用においても反映されている。

工業団地の発足に際しては、過去の自主管理モデルに対する反発が存在したことも見落してはならないだろう。ブルガは以下のように述べている。「共同体信用金庫及びその他のいくつかの自主管理生産プロジェクトの経験は、否定的なものであった。とりわけ、その劣悪な経営と非効率がその本質であった。以下のことがたしかである——このモデルに対するある種の不信が生じた。とりわけ、個人的事業や、自分の資金と努力や、そしてインフォーマル・セクターとして発展することなどに慣れていて、小商人あるいは小工業者の場合がそうであった」<sup>27)</sup>。

以上のようにして発足した工業団地は、今や企業数1200、雇用労働者2万人を抱えるまでに発展した。工業団地の機能としては、次の3つが考えられる。

- (1) 工業製品の供給——毎週土・日曜日になると多数のビジャ・エルサルバドル市民が工業団地を訪れ、買い物する姿がみられる。地域に対する工業製品供給の面では工業団地は完全に成功しているといってよい。
- (2) 雇用創出——地域における雇用創出の面でも工業団地は成功している。古い数字だが、1991年現在（200企業、1200名雇用）、その60%がビジャ・エルサルバドル住民であった<sup>28)</sup>。
- (3) 外部所得——工業団地は、ビジャ・エルサルバドルの外部(リマ首都圏、地方、海外市場)に対しても製品を供給しており、この面でも機能しているといってよい。

このような、いわば「マイクロ工業化」としてのビジャ・エルサルバドル工業

---

25) [Ibid. :141].

26) 1989年ビジャ・エルサルバドルには2800の商店があった。その64%は食料の販売店であった[Zeballos : 286].

27) [Burga : 1989:100].

28) [Távora 1994 : 134].

団地の経験は、他の途上国においても参考にされてよいのではあるまいか。つまり、小生産者を組織し、輸出能力を持つことができるようになるまで育成するのである。実際に2-(3)で紹介するチャルコの工芸企業のように、独自に海外市場を開拓し、インターネットにまで進出しようかという企業も現れているのである。つまり、内発的自力依存的開発戦略<sup>29)</sup>の一事例といえるのである。

表 3 用途別土地比率

土地用途	ヘクタール	%
1. 農牧業地帯	500	18.5
2. 海岸 "	193	7.1
3. 遺跡 "	100	3.7
4. 工業 "	200	7.4
5. 住宅 "	1,325	49.1
6. 未利用 "	380	14.0
合 計	2,698	100.0

出所) Barga 1989 : 63。[1989年現在の統計と思われる]

しかし、手放しで絶賛してはられない深刻な問題を抱えていることもまた事実で、次節においてそれを明らかにしたい。

## 2 工業団地の企業主たち

工業団地の1200企業は7つの組合に組織化されている。大きいものから順にいうと、(1) 金属加工業、(2) 家具製造業、(3) 服飾業、(4) 鋳造業、(5) 皮革業、(6) 工芸業、(7) 食品業、がそれである。ここでは、この7つの組合のうち服飾業を除く組合員7人とのインタビューを紹介する。

29) [西川潤 2000]。

(1) ノア (Basilio Noa, 40 歳, 家具製造業)



ノア

——1972年ワンカベリカからリマにきた。ビジャ・エルサルバドルに親族がいた。1982年に企業を設立、工業団地はまだ存在しなかった。そこでビジャ・マリア・デ・ツリウンフォに設置した。1986年には工業団地の計画がすでにあつた。ビジャ・エルサルバドル小産業手工業組合 (APIAVES)<sup>30)</sup>に参加した。現在雇用労働者は50人、その賃金は2.1~2.4万円、資本は150万円、販売高は月300万円である。

——当初の問題としては、資本不足があつた。さらに空間の不足があり、工場の規模に影響した。

——現在300人の家具製造業者がおり、APIAVES および家具製造業組合 (gremio de carpintería)に組織化されている。

——工業団地の成功の秘訣は何かといえば、多く働くことだ。そしてデザイン・モデルを少ししか変えないことが基本である。モードは変化する。やがて売れなくなる。また、質に対する注意が肝要だ。競争に勝つことが大切である。ここには健全な競争があり、私にとってはプラスであると考えている。

——1997年個人信用が発達し、従業員も100人が働いていた。ところが1998年この個人信用が中止され、経済成長がストップした。現在もこの「売れない」状況は続いており、人々は失業し、食べるのに精一杯である。一握りの集団の

30) Asociación de Pequeñas Industriales Artesanos de Villa El Salvador.



みが家具を買うのが現状だ。

——フジモリ政権の政策との関係についていえば、1998年の不振は、アジア市場の崩壊によるものであって、特に関係はない。

——市場はペルー全国である。この点に問題はない。

——現在の工業団地は約1200企業、約2万人の労働者が働いている。その多くは地方出身者で、何も持たず、よく働く。

——1970年代の CUAVES については、ベラスコ政権の影響があった。同政権は、社会主義的傾向を持ち、ビジャ・エルサルバドルを支援した。

——工業団地には、大企業、社会的所有企業、協同組合企業などが存在した。これらの企業は成功せず、多くは姿を消した。工業団地の傾向は「市場的社会経済(economía social de mercado)」である。ネオリベラリズムではないが、価格・デザイン面での競争が存在するリベラリズムである。

——市の政策は、初代アスクエタ市長期に発展があったが、今は中断している。市の開発計画に対しては関心を持っている。アスクエタ期には工業団地と市当局の間には密接な関係があった。

——現在最も深刻な問題は市場の狭溢だ。その理由はペルー経済の後退にある。工業団地全体について市場・経済が動いていない。そこで値下げをやむなくされるが、コストを割ってさらに悪化する。脱出口は政府である。ペルー工業はまだ幼稚で弱い。ペルーで生産できるものは保護すべきである。例えば農産物がそうで、輸入は必要ない。

——小零細企業対策としては、輸出の可能性を追求するべきだ。質と価格の競争が存在している。我々は遅れている。先進国と競争できない。ただし、その中で工芸品(アルパカ)輸出は評判がよい。このような輸出企業は保護すべきである。

——自由化はするべきだ。ペルーはまだ世界で孤立している。これはよくない。例えばペルーはキューバのような島ではいられない。技術水準が低い。農業についても国際競争を導入すべきである。

——例えば、地方では、1キロの米と24キロのジャガイモが交換されている。農民は損失を出し播種できない。技術も遅れている。計画化もない。産業省も

活動していない。輸出用穀物のマカ(maca)は1キロ1.8ソルだが、ジャガイモは1キロ0.1ソルだ。農民に情報が伝わっていないことがこのような現象の原因だ。ペルーの農民は文盲で、情報へのアクセスがない。農業省、農村むけの諸機関、NGO は対策を立てるべきだ。

——ビジャ・エルサルバドルの経済には変化がある。

(1) 1971~80——砂漠だった、(2) 1985~86——経済はよくなった、(3) 1988~現在——工業団地にも人が来るようになった。以前はモトタクシー〔小型三輪タクシー〕も無かった。生活様式も精神状態も変わった。集会の必要もなくなった。したがって CUAVES も変わるべきだ。現在では、市の治安が重要な問題となっている。

——10年前には工業団地へ人々は必要性により来たものだった。今では、商品化〔質・価格などを検討すること〕のために来るようになった。市当局は、商工開発政策を必要としている。これは組合にとっても問題だ。

——ペルー=日本関係については、努力・気質において日本は模範であると考えている。いかにして技術的に発展したか、という点において見本であると思う。他方、ペルーには資源があり、発展の可能性がある。しかし、この国はこの10年間変化がない。計画化がない。そして一番重要なものは教育であろう。

(2) リバス (Julio Rivas, 58 歳, 製靴業 [皮革業組合])



リバス

——1971年の土地侵入以来ビジャ・エルサルバドルに居住している。現在の企業は1987年工業団地創立時に設立した。雇用労働者は約5人(変化がある)。その平均賃金は1.5万円である。資本は50万円、年間販売高は100万円である。

——当初の問題は、経済的なものだった。基礎的サービスがなかった。当時の組織は、下から上まで垂直的なものだった。いくつかの問題は工業団地内部で解決した。その一つは住宅ゾーンとの間の問題だった。

——業種によりグループを結成した。皮革、家具、金属加工、工芸、食品、鑄造、服飾の7つの組合を作った。その中で皮革についていえば、5年前に作った。現在まで21か月間私はその会長をつとめている。市場はリマのデパートだが、密貿易がダンピングしていることが深刻な問題となっている。アジアからの密輸商品の価格に対してコスト面で競争できないからだ。

——現在の最も重要な問題は、政治文化だ。工業開発における小企業は目下危機にある。かつてはスペインからの支援があった。中央政府、地方政府及び日本からも支援があった。

——現在、政府とは反目しあっている。投資家は、台湾、韓国、日本などからも来ている。投資家は組織化しているが、政府は協力しない。政府は、金融面において台湾や大資本を支持している。しかし、実質的な競争を行うことは可能である。

——アスケタは工業団地の創立者の1人である。しかし、それは初期のことであって、1人の指導者がいつまでも指導するということはおかしい。

——組合内の競争については、組織化している。秩序が存在している。組合は自立しており、民主的運営がなされている。工業団地生産者組合 (CPPI)<sup>31)</sup>のもとに団結している。

——市場については、輸出はまだ行っていない。例外的にボリビアに輸出している。市場としてのリマはまだ新しく、2年前に開発したばかりである。

——市当局との関係については、理事会メンバーに市当局が加わっており、商品化のキャンペーンその他を行っており、密接な協力関係を持っている。理事会は変化した。以前は産業省のもとにあったが、現在は地方政府のもとにある。

31) Central de Productores de Parque Industrial.

## ビジャ・エルサルバドルにおける社会主義と工業団地

——現在の問題は、販売高の減少である。市場は狭溢であり、そのうえ密輸品が入ってきていて売れなくなっている。

——工業団地の現状は、地方政府のもとにあり、グローバル化も進んでいる。政党も強い。ペルーも共産主義崩壊の影響を受けた。テロも無くなった。野党はいないのも同然だ。中道左派が主流となっている。

——フジモリ政権については、最初の年は投票したが、もう変化が必要だ。

——日本との関係については、この10年間支援が大きかった。援助は機械などの物資の形で送ってきた。日本あるいはアジアとの貿易関係は重要である。さらなる技術援助が可能であろう。技術移転については、工業団地では少ししか行われていない。JICA（国際協力事業団）が部分的に行っているだけである。ペルーからの研修生をもっと受け入れて欲しいと思っている。

### (3) チャルコ (Felipe Chalco Alvarez, 50歳, 工芸業)



チャルコ

——当社は、工芸品とりわけ木工製品を作っている。画学のクスコ派の作風をとっている。1980年に設立した。私は1971年の発足時からビジャ・エルサルバドルに住んでいる。雇用労働者は10人、その月間賃金は技師2.4万円、助手1.8万円である。資本は150～200万円、年間販売高は210～240万円である。

——なぜ工業団地に参加したかといえ、小企業への対応策がととのっていたからである。1981～83年多数の店と取引関係を持っていた。支障があつて83

年以降、直接客に売られるようになった。現在もリマからの客がある。

——現在の工芸品の需要についていえば、問題はない。他にない商品を扱っているの、客は沢山いる。どの位で技術をマスターできるかといえ、1年もあればできるようになる。仕事を好きになることが肝要だ。工芸品といっても色んな製品がある。例えば、陶器、アルパカ毛糸、織布（ワンカヨ製）、銀細工、青銅、皮革などがある。

——技術習得は簡単だ。実践が大切だ。学校での教育は役に立たない。将来スペインやイタリアに旅行して新しい技術を学びたいと思っている。

——輸出するためには、品質に注意する必要がある。目下チリから注文がきて製作しているところだ。

——材料の木は杉(cedro)とマホガニー(caoba)で、セルパ〔密林地帯〕から運んでくる。原料の確保については、値上りが問題だ。ピエ〔pie, 30センチ四方の断片〕が昨年4ソルだったのが、輸出されるようになって、8ソルに倍増した。他の木は材料にならないので、これは問題だ。

——工業団地は、ペルーの他の所にならなほど組織されている。そのうえで私の希望としては、訓練のための学校を作りたいと思っている。現在プロジェクトを提案中である。

——銀行融資については、関心は高いが、直接関係はない。枠が厳しいのと、高利子が問題である。つまり銀行は、迅速さ、高利、金額などに問題がある。5000ソル位しか融資してくれないが、1万～3万ソル位の枠が欲しい。

——市当局についても問題があり、例えば建築許可にしても技師が測量して、許可がおりに2～3ヵ月かかる。

——CUAVESについては、時流に合わなくなって、便宜さを失い見捨てられた。

——プマル市長については、若すぎて経験が足りない。ビジャ・エルサルバドルの歴史も知らない。労働者でもそうだが、最初からつとまるわけではない。

——政府からの援助は受けていないが、反テロ政策はよかった。資金不足という問題がまだ残っている。政府は支援すべきだと思う。現在、工業団地の理事会に政府側代表者が参加しているが〔6人中3人〕、何もしていない。機械化

が遅れている。もっと早く進めるべきだ。政府はもっと雇用や仕事のために政策を持つべきである。我々は能力を持っているし、十分に働いている。政府の失政の一つにビジャ・エルサルバドル＝サンファン・デ・ミラフロレス間の鉄道がある。政府はもっと考えるべきだ。いくら浪費したか、はかりしれない。

——将来の展望としては、価格の安定、工芸店を作ってもっと客と協力し合うこと、海外市場の開拓などがある。

[質問——輸出についていえば、技術は十分あるとみえるが、宣伝が問題ではないか?]

——現在インターネットのホームページ作りを準備中である。経費は2年間で80ドルで、目下写真を作成している。他にも、新聞広告を行っている。インターネットの利用については、企業主によって異なるが、少なくとも工芸品の場合は、インターネットを利用すべきだろう。

#### (4) クリ (Adrian Curi Machuca, 45 歳, 金属加工業)



クリ (右は弟)

——私の企業の設立は1987年である。従業員8人、その賃金は1.4万円、資金は50万円、年間販売高は150万円である。

——工業団地の創設期からのメンバーであるが、当初工場を建てるのは難しかった。次の問題は技術化だったが、経験によって克服した。現在はレストランの厨房機器を生産している。顧客は、リマや地方にいる。

——工業団地については、生産が主体をなすべきなのに、政治化しているという問題がかつてあり、今もある。我々の努力に報いることが少ない。しかし他方では、必要がないのに金を貸す。しかし、本来は自分の資金に頼るしかない。多数の人物がこのような運営をやっており、そのうちには左翼も含まれる。我々は、素朴でつましい生産者で、進歩派だが、我々を利用しようとする人物がいる。それは、中央政府の者であったり、地方政府の者であったりする。プロジェクトがあってもその通りに実行しない。プロジェクトの実行のためには、資本や技術などを必要とする。しかし、前進させることなく、壁塗りしかもたらさない。

——銀行融資を受けられない、という問題がある。貸すにしても期限と利子がついている。プロジェクトを信用していない。口はうまいが、やることは違う。また高利にも困っている。例えば、Drade という企業のプロジェクトがあったが、中古の機械を持ち込み、失敗した。すべての投資は回収されるべきだ。

——我々は進歩しつつある。資金も少しずつ増えている。プロジェクトは世界的なものだが、技術は我々のものだ。

——市場の問題が現れ始めている。原料については問題がない。メキシコ、ブラジル、日本および米国から輸入しているが、価格は一定している。金属加工業の組合には180名が参加しており、商品別に特化している。

——フジモリ政権については、業績はあると思う。私は彼に投票した。

——今後の課題は、(1) 輸出と (2) 技術の高度化である。現在はペルー国内での経験による技術を用いているが限界にきている。この面での日本の援助に期待したい。

#### (5) エストラダ (José Estrada Juarez, 55 歳、アルミ鋳造業)

——1989年に工業団地に参入した。資本は200万円、従業員は2人、市場はリマのみである。

——アルミの鍋の材料などを国内市場向けに作っている。機械の開発により技術革新を目指している。それによって国内・国際競争力をつけるためだ。よりよい生産物を目指すためには新技術の開発が必要だ。





エストラダ

——工業団地は国際協力によってできた。しかし、我々自身の資金によって企業を設立した。他の金が入っていない。自己資金を国が資本に変えたのである。

——現状は後退しつつあり、セミナーを開くとか、何らかの手段を必要としている。

——銀行は、利子が高すぎて融資に利用できない。我々を食いものにしていく。また、数か月で返済しろという。

——市場については、国内的にも国際的にも不足している。融資についても同様で、高利子・短期返済を要求される。また技術については、技術の高度化なしには輸出できない。

——現在はアルミ原料をカナダ、ブラジルから輸入しているが、カナダ産のものは質はいいが高い。他にアルゼンチン、ブラジルもアルミを生産しているが、ベネズエラからの輸入を考慮中である。

——原料は5トン=3000ドルもし、資金不足に直面している。市場不足が競争不在をもたらし、原料高、生産物低価格の状況を生みだしている。

——私は鑄造業だけでなく、20年間服飾と兼業し1日16時間働いてきた。

——新聞社の社長と知己になり、その社長が電話してくれたおかげで銀行の融資を受けられたことがある。その金で設備を購入し、賃金を支払った。

[質問——ある資料によれば1990年ビジャ・エルサルバドルへの投資は60%



が政府からのものだ」と書いてあるがこれはどうか?]

——開発融資公社 (COFIDE) によるものだ。政府投資のうち60%が COFIDE からきているが、そのうち30%は銀行へ、10%が申請者に流れる。COFIDE からの金は利子が高い。

——目下の経済危機の脱出口は政策だと思う。私はフジモリ大統領に反対したことはない。国内も今は静かだ。1985年ごろは発言の自由もなかった。その結果、我々は100%働いている。しかし、一番大きな問題は市場だ。とにかく売れない。

——しかしペルーはよくなった。私の故郷のピウラに帰るのに以前は24時間かかったが、今は12時間になった。そこには以前は水道も電気も無かった。私はペルーの未来を信じている。

(6) バレット (Pedro Barreto, 40 歳、養鶏業〔食品業組合〕)



バレット

——1975年ビジャ・エルサルバドルに来て、1990年企業を設立した。資本6万円、従業員3人、年間売上高は156万円である。

——初期の問題は、資本と労働と機械だった。現在は、機械の導入に関しては若干解決している。さらに融資の問題がある。銀行は必要条件を満たしていないと相手にしてくれない。

——政府はどうかといえば、何もしていない。救済もない。中企業は相手に

するが、小企業は相手にしない。工業団地以外の人を支援している。

——なぜ工業団地に参入したかといえば、生産するため、つまり企業を経営することを知っていたからだ。どんなメリットがあったかといえば、それは労働力源があったことだ。

——市場についてはあまり問題はない。しかしペルーの経済危機の影響で消費が減少しているということはある。飼料の購入についても問題はない。目下の問題はやはり資本＝労働と機械だ。解決策としては政府による活性化が必要だ。政府はもっと我々を支援すべきである。

——フジモリ政権については、再々選したことだし、彼の指導に従いたい。私はフジモリ派(Fujimorista)である。

——未来の展望については、(1) 政府の支援、(2) 労働力源をふやすこと、(3) 市場の拡大、があげられる。

——プマル市長については、政府のために働いているとみている。

——工業団地は成功しているといえる。なぜなら世界的に知られているからだ。食品業組合の可能性としては、技術導入すればもっとよくなるだろう。

——ペルー＝日本関係は、情報が限られているが、良好な関係にあると思う。日本についてのイメージは、成長国、ハイテク、勤労、などで、模範とすべき国だと考えている。

#### (7) リオ (Marian Río Huamanhorqué, 48 歳、製パン業 [食品業組合])

——1985年製パン業企業をビジャ・マリア・デ・ツリウンフォに開設。1990年に工業団地に参入。資本70万円、従業員4人。市場は近隣都市とビジャ・エルサルバドル。

——初期における問題は銀行だった。融資してくれないし、高利子をとる。きわめて官僚的な対応で、我々小企業を相手にしない。工業団地全体が同じ問題を抱えており、みんな困っている。何らかの支援、ないし技術的援助が必要だ。

——新規投資が必要になっているが、現在は利子が高くてできない。そのため管理がうまくいかないし、技術が欠如している。



リオ

- 販売については季節変動があり、夏は減少し、冬は増大する。
- 食品業組合は一番小さい組合で、19組会員しかいない。
- 解決策としては、政府の支援が必要だ。国際協力に頼りたいが、問題もあり、実現していない。
- 工業団地への参入はよかった。例えば、政府の援助も受けられたし、満足している。しかし、現在は支援がない。また、技術上の問題点が大きく、改良すべき点が多い。
- フジモリ氏については、少し悪いと思う。
- 日本は、遠くの国で超発展している国、小企業の我々にとって模範にしたい国だ。

#### (8) 小結

以上でのべたインタビューから、現在かかえている問題点3つ(a)~(c)とそれからの解決策(d)について発言内容を以下の表4において整理してみた。

企業主たちの抱える問題は、(a)市場不足、(b)融資不足、(c)技術不足の3つで、大半の企業主が共通の悩みを抱えていることがわかる。(a)市場不足の原因は、1997年の東アジア通貨危機の影響による経済不況である。したがってペルー独自の力では脱却するのは難しい。(b)融資不足の原因は銀行の経営政策の反映である。高利、短期返済、官僚主義など、銀行に対する不満を誰もが

表4 工業団地の諸問題と解決策（○印は言及を示す）

	(a) 市場不足	(b) 融資不足	(c) 技術不足	(d) 政策
1. ノア	○			○
2. リバス	○			
3. チャルコ		○	○	○
4. クリ	○	○	○	
5. エストラダ	○	○	○	○
6. バレト		○	○	○
7. リオ		○	○	○

もっているようである。今後は、小企業向けの小口金融を行えるような金融政策が必要であろう。(c)の技術不足についても企業の自力だけでは解決が難しい。何らかの支援政策が考えられてしかるべきであろう。

そして、次に興味深いことは、企業主たちはこういった苦境からの脱出口として、政府の(d)政策に期待していることである。そもそも政府の支援によって出発した工業団地であるから、これは当然のことだろうが、政府は、この信頼に対し十分に答えるべきである。

#### IV むすびに——自主管理社会主義から住民コミューンへ

本文において述べたことから、以下のような暫定的結論を導き出すことが可能である。

##### 1 自主管理社会主義の限界

ビジャ・エルサルバドルの自主管理社会主義とは、1970年代ペルーの情況が生みだした、ある意味で歴史的必然だったのではあるまいか<sup>32)</sup>。したがって市当局発足という情況の変化によりその歴史的使命を終えたのである。

自主管理社会主義の限界をもたらしたものは次の3つであると考えてよい。(1) 新しい指導者の不出現。新しい情況に適応できるような指導者が出現しなかったこと。(2) 政治的問題。党派と共同体のあいだの葛藤がマイナス影響を与えたこと。(3) 人口増<sup>32)</sup>。アスクエタも指摘しているが、当初の7万人から30万人に爆発的に増大したビジャ・エルサルバドルの人口は、CUAVESの指導力に限界をもたらしたと考えられる。つまり、何らかの技術的改善が必要であった。にもかかわらず CUAVES は、現在でもかつての組織及び集会主義を堅持しているのである。

## 2 ミクロ工業化の試行

かつてペルーでは25の工業団地計画が存在したそうである。その中で唯一成功したのがビジャ・エルサルバドルであった。その成功の理由は、やはりビジャ・エルサルバドルという地の利に恵まれたからであろう。ビジャ・エルサルバドルの人々は、その80%が地方からの移民であった。そして CUAVES のもとに組織化され、「集会文化」を通じて参加を訓練された。このような歴史的経験が工業団地の成功の基盤を築いたといつてよからう。

さらに、小規模・零細企業を組織化・集団化し、輸出能力を持つまでに育成するという「ミクロ工業化」は、他の途上国も見習つてよい、内発的自力依存の開発戦略の一事例なのではあるまいか。

## 3 自主管理社会主義から住民コミュニティへ

こんな風にして、外見上は、70年代のビジャ・エルサルバドルと80年代のビジャ・エルサルバドルは大きく異なってみえる。しかし、自主管理社会主義と

---

32)70年代ペルーにおいて出現したビジャ・エルサルバドルのような「都市共同体」を自治政府(*autogobierno*)と呼び、いくつかの仮説を提唱したものとして次論文があげられる。ただし、「都市共同体」にくらべると、「自治政府」という用語は、法制的行政的側面のみをとらえる狭い概念であるように思われる[Germana 1994]。

33)ビジャ・エルサルバドルの人口増の原因は国内移民である。そもそも1971年の創立時のビジャ・エルサルバドル住民の80%以上が山岳部からの移民であった。このような農村から都市への移民の動機はその57%が職を求めるものであった[Zeballos 1991:210]。

工業団地は、ともに同じ歴史的脈絡から発生した現象なのである。つまり、一つの都市共同体の進化がもたらした状況への適応、あるいは発展を表しているのである。

したがって工業団地を含む現在のビジャ・エルサルバドルを、「住民コミュニティ」と呼ぶことが可能であろう。その象徴的な出来事は、1999年11月14日行われた「開発計画」にたいする住民投票である。約5万人が投票し、その87%が賛成し、7%が反対したといわれているこの投票<sup>34)</sup>は、ビジャ・エルサルバドルの都市共同体としての性格がいまだに根強く残っていることを印象付けた。さらに2000年3月には市民「参加型予算」の編成が行われ、市の予算（計6千万円）に住民が参加するという試みが行われた。

このような現象が表していることは、たとえ CUAVES の影響力が低下したといっても、いまだ存在しているその構成員（CUAVISTA）である市民が健在であることを示している。

1971年発足したスラムの貧民コミュニティは、進化して自主管理社会主義をもたらし、80年代以降は住民コミュニティへと発展し続けた。その歴史的画期の一つが工業団地なのである。

---

34)市職員 Nestor Ríos 氏からの情報による。

参考文献目録 (BIBLIOGRAFIA)

1 Fuentes Primarias (Entrevistas)

Con Antonio Aragón	26/05/00
Con Michel Azcueta	14/04/00
Con Eduardo Zeballos	18/05/00
Con Manuel Carrillo	15/04/00
Con Antonio Aragón	16/08/00
Con Basilio Noa	30/05/00
Con Julio Rivas	27/05/00
Con Felipe Challco	16/06/00
Con Adrian Curi	16/06/00
Con José R. Estrada	08/07/00
Con Pedro Barreto	20/06/00
Con Marian Río	20/06/00

2 Fuentes Secundarias

Burga, Jorge B.

1989 *Villa El Salvador, la ciudad y su desarrollo: realidad y propuesta*, Lima: CIED.

Germana, Cesar

1994 "Algunas hipótesis sobre el autogobierno de las 'comunidades urbanas' en el Perú," *Revista de Sociología*, vol. 18 Núm 9.

Távora, José I.

1994 *Cooperando para competir: redes de producción en la pequeña industria peruana*, Lima: DESCO.

Zeballos, Eduardo, et al.

1991 "Villa El Salvador: tiempos de lucha y organización." En: Riofrío, Gustavo (ed.), *Lima: para vivir mañana*, Lima: CIDIAG/FOVIDA.

3 邦語文献目録

西川 潤

2000 『人間のための経済学』岩波書店。

原田金一郎

2000 「自主管理都市共同体ビジャ・エルサルバドル——代替的社会主义論のためのフィールド・ノート (予備的省察)」大阪経済法科大学『経済学論集』23巻3号。

ビジャ・エルサルバドルにおける社会主義と工業団地

ブランコ、ウーゴ著 山崎カラル訳

1974 『土地か死か』 柘植書房。

マリアテギ、ホセ・カルロス著 原田金一郎訳

1988 『ペルーの現実解釈のための七試論』 柘植書房。

同上 辻豊治 / 小林致広編訳

1999 『インディアスと西洋の狭間で——マリアテギ政治・文化論集』 現代企画室。

〈注記〉

本稿は、ラテンアメリカ政経学会第37回全国大会（2000年11月4・5日、神田外語大学）に論文参加したペーパーに写真を追加し、かつ改訂を加えたものである。